

# 幼児の音楽経験に於ける環境による

## 機制について

愛知学芸大学助教 水野久一郎

### 一、音楽経験と環境について

一般に音楽の能力は「生れつき」のもの即ち才能であると云われて居るが、此の事自体は非常に多くの問題を包含して居て、吾々音楽者にとつて大きな関心事ではあるものゝ、その学問的意味附けは猶科学的検討を加えつゝ、ある多くの学者の研究に挨つことゝして、一般的にある能力の要素を問題とする場合、単に表面に表わされた皮相的なものゝみについて遺伝的要素のみと過大評価して結論を立てることは、やゝ早計ではないかと考えられる。

遺伝学者の研究によれば「音楽の能力は他の部門の芸術より比較的遺伝的傾向が多く見られるが、然しその音楽才能もそのみで他に関連をもたない才能ではなくて、種々の精神的機能と深い繋りをもち音楽才能を構成する要素が同時に人格構造の重要な因子になつて居るのであつて、音楽才能が内面的に精神生活のどの様な位置を占めて居るかと追求すれば、そこで遺伝的要素と環境の支配力との複雑な影響が現われて来る」と。斯うした考え方に基いて吾々は幼

児の音楽経験を指導する際所謂「生れつき」と輕視して教育力を過大視したり或は重要視する余り教育効果を過小評価することは輕平であつて遺伝的な「生れつき」のものであることは認めざるを得ないが、それを伸長發展させる教育の役割は非常に重く、従つて環境の支配力が幼児の音楽経験に於て可成強いと見なくてはならない。

幼稚園や保育園に入園当初の幼児達をみると各人各様な音楽傾向を持つて居るのが普通で、表現する力に於てその傾向が甚だしい。若し是等の幼児達に一樣な教育を施したならば必ず結果は不徹底、不均衡なものになり落伍者も亦現れ中には非常に好成绩を示すものも現れるだろう。そうして之等の教育が単に皮相的な能力調等に拠つて行われたとすれば調査そのものも甚だ不完全な結果しか得られず又教育の結果も芳しいものではない。殆んどの人々は生れ出たその日から母親の滋愛深い子守歌で育まれ、与えられた音響玩具で成長し、日々ラジオ等の音楽でその音楽経験が織られて行くのであつて、是だけの事実をとつてみても即ち幼児は各々異つた環境の支配を受けたいわけには行かないし従つて各々が異つた傾向を示す等で

あつて指導者は是等の傾向を慎重に考慮すべきである。更に之等の傾向は必ず將來の音楽経験に大きな役割を果すであろうことを考えれば幼児の音楽的「環境」の研究は音楽経験指導上重要なものと考へられる。

「環境」と云う言葉はこゝで一応検討を加へなければならぬであらう。然し何が音楽経験の機制となる環境であるかを考える時音楽才能が全人的人格構造の因子にもなつて居る点から見れば非常にその範圍は広い様である。即ち本人に對するすべての歴史的、社会的な影響からその本人の身体的、生理的条件をも包含し単に家庭に於ける躰或は教育等の人為的なものに止まつては居ない。然し幼児の音楽経験の指導に當つては自ら環境についての研究範圍は撰択されるであらうし、又他の研究結果から類推することの可能性も發見されると考へられる。

猶吾々が幼児の音楽経験を考える上に於て環境に注目する理由を次の諸項について挙げたい。

(1)、旋法及び音階の發達が各民族共通ではない。  
先進文化民族に旋法が誕生した時は一様にペンタトニック（五段旋法）であつた様であるが、ヨーロッパへの経路とアジアへの経路と二方向に移動するに従つてその姿が變つて行つた様であるが支那、日本のペンタトニック、ヨーロッパの七音々階シャムの六段音階ジプシーの音階バビロニアの旋法等何れも各民族の趣向及感覺によつてその方式が形成されたものであつて、之等の旋法の環境に生活する人々は勞せずしてそれ々の旋法による音楽観に生きて居るだらう。

(2)、発声、発音に風土性が強く民族的な傾向さえ見られる。

屢々東北地方の人々は声質が良いと云われ此の事は小、中学校音楽コンクール等に現れた成績が之を示している。是等の理由は決定的には云えないが氣候風土が強い影響を与えているものと考へられる。猶發音上のアクセントに至つては言を挾たないであらう。

(3)、旋律趣向や歌唱能力が生活環境により傾向をもつこと。最も極端な例としては日本民謡に於ては鋭い感受性と美しい表現をする人が、表現形式の異なるヨーロッパの音楽に對しては何らの感受性をもたない人が屢々見受けられる。之は民族性によるものであることも否めないが、明らかに生活環境の大なることを物語つてゐるものであらう。或は流行歌謡に深い興味をもつ或る社会の人々が全々純粹音楽に興味を見出せないなど、何れも環境による機制が可成の意味をもつものと考へられる。

(4)、楽器のある家庭とない家庭で幼児の能力に差のあること。  
一般的に鍵盤楽器が家庭にあるかないかあつて幼児の音感に差が見受けられる。之は常に固定した音を聴いて居ると聴かないのとの差であらう。然し蓄音機などで補われた例もあるので、楽器類のあるなしは音楽能力にやはり大きな影響があるものと考へられる。

(5)、人々の音楽経験は音楽を聴くことが圧倒的多数で、然も歌が多い。  
音楽を専攻しない学生（滿二十才）百名について彼等の音楽経験を調査した結果次の様な結果が得られた。

イ 最初の音楽経験は、身近な大人やその他の演奏を聴いたことを記憶する者が圧倒的に多い。

ロ それ等の経験の中歌がやはり多い。

ハ 愛好した音楽経験も同様聴くことに集中されている。

ニ 音楽経験を嫌悪した理由は演奏の問題が多い。

之等の事実を総括すれば、人々が如何に与えられる音楽に心を傾けて来たかが示されて居るのであつて、こゝでも環境としての音楽が人生初期の音楽経験を導いて来た様である。(表一・二・三

・参照)

以上人々の音楽経験はその才能如何に拘らず多くの環境の影響によつて形成せられる面について考へて来たが、元來指導上の見地から白紙にたとえられる幼児の音楽経験も既に幾多の色別けがなされている様である。然し人格全体がなほ未完成、未分化で環境に影響され易い幼児期になされた経験は人格が固定し容易に環境からの影響によつて変化しない大人に比べればその結果ははるかに大きく、又理想的且賢明な計画によつて絶えず音楽経験の指導が積まれて行くならばその結果は測り知れないものがあると考えられる。而して理想的且賢明な指導とは幼児各自の才能を知るは勿論、各自の環境を研究することによりその音楽経験の方向と過程を知り、それに適応した教材と適切な指導計画が立てられることである。

## 二、音楽経験に現われる種々の傾向に

ついて

多くの幼児は彼等の音楽経験を於て著しい傾向を持つて居る場合

が多い。

普通四、五才頃の幼児は歌を歌つても、楽器を演奏しても、或る意味では正確なものを期待することは期待できないのが普通ではあるが猶之等の中には要素的な面と実践的な面とで種々な傾向を持つて居りそれ等は過去に受けた影響の結果であるものが多く又それ等の傾向は可成根強いものらしい。

(1)、旋律消化に関する傾向

旋律は音楽の生命であるが幼児にとつてはそれ程重大なものではないらしく、彼等の感覚は比較的鈍いか或は大した興味を持たない場合が多く狭い彼等の声域以外の音は伸々消化されにくい。

(1) 旋法に関する興味 導音は上行、下行共に困難で日本に於ては全音導者が多く消化される。

(2) 調性 現今の幼児は長調により多く親しみを有し屢々陽旋法の楽曲にもより良い消化力を示す。

(3) 旋律の跳躍と順次進行 個人的な差が多い。

(4) 旋律の類型 寧ろ歌詞に重点的な興味を持つ場合が多いが無限旋律より動機的な反復をしたもの。

(5)、和声に対する興味

概して複雑な不協和々音は消化困難で、主要三和音及其の転回程度の消化は大体容易で、副三和音及転調的和声は問題があらう。作曲技巧から云えば簡単なアルペジオ或はアルベルテイパツソが好まれる。然し稀に用いられた半音階的不協和々音に対しては瞬間的に興味を懐くらしい。又調性は勿論長調が好まれる。

(6)、リズム反応

幼児のリズム欲求は家屋等の建築様式、器物、生活の規律等リズム遊びのできる状態が或る種の条件になるが、主として旋律や歌詞の興味に集中し易く、フレーズは終りの方が急がれ縮少したり長い音は不確定（短くなる）になり易い。楽器や他人に頼つて歌うことが多く、その歌は余りリズムミカルではないので他の簡単なリズム楽器やリズム運動と関連して行わなければ余り快適ではない。

#### (4)、発声の一般的傾向

(1)発声の明暗は環境に負うところが多い。然し大部分の幼児は明るい声を持つた者が多いことも事実である。家庭的に不安定な或は生活地帯が精神生活に芳しくない者、或は雑音に満ちた環境に生活する者等その差は可成開きがある。

(2)声の質は屢々不快で耳障りのある場合があり、透明な声か粗雑な声かは生理的な制約を受ける場合もあるが之も前項同様環境の影響が大きい。

(3)呼吸は大体的な制力が弱くフレーズの頭で爆發する様な状態で歌われブレスもその為不正確である。之は家族、教師など常に接する人々の歌唱技巧と相当関連するものと思われ。

#### (5)、音楽鑑賞に現れた傾向

如何なる音楽を好むかは音楽経験を指導する人々にとつては大きな関心事である。純粋音楽を好むか描写音楽に興味をもつか、或は流行歌謡、ジャズに心を惹かれるか等は生活地帯及家庭の人的環境の影響が絶對的に大きく繁華に生活する母親達の心ある人々の悩む問題である。一般的に幼児は軽快な音楽をよく消化するが

荘重なものを好む場合は少く、ロマンティックな旋律なものには殆んど興味を懐かないし又、演奏時間の長い音楽も亦然りである。

#### (6)、楽器の演奏に対する興味

現今の幼児は楽器に対しては相当興味をもつ様であるが概して発音の簡単な高音域の楽器、例えばハーモニカ、シロホン、打楽器などを容易に消化しピアノ・オルガン等の鍵盤楽器も発音が簡単であるので興味をもつが絃楽器類は微妙なタッチと或る程度の統制力を要するので比較的興味は少ないのではないか。

以上一般的な幼児についての傾向を列挙したのであるが之等の中或ものは環境の絶對的支配をうけ或ものは環境よりも才能の結果であるものもあるが、幼児の指導に當つては之等の考え方が幼児個々に於いて考察されることが、望ましい。

### 三、幼児の音楽経験に於ける環境による機制

今仮に幼児の生活は殆んどが環境であるとしてもそれが彼等の音楽経験の指導に何らかの意味を持ち且解決のつき易いものから取上げて行き度い。そこで人的な環境としてこの家族の人々の音楽状況幼児の生活地帯の人々、家庭の職業等物的環境として家庭に有し又活用している楽器類、家庭附近の音響現象（工場の雑音、ラジオ、ラウドスピーカー、交通による雑音或は家屋の建築様式などが挙げられよう。

(1)、幼児は誰から歌及歌うことを教えられるか

名古屋市の保育園及幼稚園の園児（三才から五才迄）九百名（此

の中には職業別及住居地帯別で極く上流の家庭を除き殆んどが含まれている。について調査した結果園の教師の影響が最も大きくそれに次ぐのが家庭の人々で、驚くべきことにレコードによる流行歌謡や映画などの影響は教的に僅少で殆んど問題にならないことも興味がある。是によれば幼児の音楽経験の大部分を占める歌の生活が専ら教師及家族の有形無形の影響によつて形成されていることは彼等が如何に身近かな人々によつて導かれるか、見受けられる。(別表四参照) 然も此の調査によつて家族の中でも彼等に比較的身近な兄、姉、母等の影響が大きく、父、弟、妹その他の家族の影響はそれ程でもないことが教的に示されている。

(2)、家庭に於て誰が最も歌を歌うことが好むか(表五参照)

此の項では母姉兄の順序で歌を好むことが教的に示されて居り、是等の家族の人々の唱歌が家庭の音楽生活の中心を占めて居る様に思われる。然し是等家庭に於ける歌曲の愛好者の歌唱能力は専門的な立場から見れば甚だ危げなものであることが次の調査でほゞ察せられる。

(3)、家族の中多少でも音楽を専門的に学んだことがあるか。

洋楽及邦楽娯楽的なものを含めて、その学習期間や学習程度などを一応伏せて出した数は24%に過ぎず、76%は普通教育で音楽の授業を受けた程度であるとすれば一般の家庭で幼児達に正確な指導的役割を果すことは困難なことではなからうか。それで現状では唯正しく演奏することの指導面のみでも殆んどが教師に課せられた責務になつて来る。果して多くの教師達が是を満足させて呉れるであらうか。(表六参照)

第一表 最初の音楽経験の記憶 (100名)

大人の演奏を聴いた		自分達で演奏した		音楽を聴いた	
26		22		52	
イ、ピアノ	7	イ、大勢で歌つた	18	イ、家庭のレコード等	18
ロ、絃楽器	1	ロ、一人で歌つた	1	ロ、学校幼稚園等で	9
ハ、合奏	2	ハ、何か楽器を弾いた	1	ハ、その他	25
ニ、声乐	10	ニ、音楽遊劇をした	2		
ホ、合唱	6				

(4)、家庭にどんな楽器があり又誰が演奏するか。  
楽器を所有する三百名について或傾向が得られた。之によれば全体的には扱い易い洋楽器の数が多く邦楽は予期したより少い。又洋楽では簡単な演奏容易な楽器が多く邦楽では伝統的な琴三味線が多い。演奏する者については表に現れないが青年少年層は洋楽が大部分で壮年層と青年の一部に邦楽がある。是等楽器の分布状態は或意味では日本の家庭の一断面かも知れない。そうして是等

第二表 愛好した音楽経験の記憶

大人の演奏を聴いた					自分で演奏した					
33					26			11	23	7
イ、ピアノ	ロ、絃楽	ハ、合奏	ニ、声楽	ホ、その他	イ、器楽	ロ、声楽	ハ、その他	音楽遊戯	レコード・ラジオ	なし
7	9	3	13	1	7	15	4	11	23	7

第三表 嫌悪した音楽経験の記憶

心理的に不愉快					曲の効果		教育上		
45					27		22		6
イ、自己の不足を感じた	ロ、はにかみ	ハ、余り感傷的	ニ、余り野性的	ホ、その他	イ、不愉快な音	ロ、下手な演奏	イ、不愉快な教師	ロ、禁じられた親から音楽を	なし
24	13	1	4	3	9	18	21	1	6

第四表 幼児は誰から歌を教へられるか  
900名(3才-5才)

	人数	%
1、近所 {レコード屋、ラジオ屋 映画館、喫茶店等	30	3,3
2、家庭 父、母、兄弟、その他	243	27,0
3、家庭 ラジオ、蓄音機	189	20,8
4、教師 保育園、幼稚園その他	389	40,9

楽器を有する家庭は有しない家庭の三分の一の数を超えない程度であるのは少々寂しい状態で斯うした楽器の面から見て貧困な日本家庭に育つ幼児の音楽経験は教育機関で特にそれを補う施設を求めているのではなからうか(表七参照)

(5) 家族の職業  
未だ数的に確定した結論は得られないが職業そのものが幼児に影響すると云うより、職業によつて形成された家族の人々の生活態度や性格から受ける影響があるものと考えられる。

(6) 生活地帯による影響  
住居地帯とか繁華街或は工場地帯などそれとく幼児の音楽経験に影響を与えると思われるが、同様な力が彼等の音楽経験の何ものとの様に変化させたかと云う結論は今後の研究に俟つこととし、繁華街などで与えられた歌が3%強であるのを見る時こうした物的環境の力より人的環境の方が遙かに強く影響するものと考えられる。

前に述べた様に環境による機制は更に多くのものを含むことは、事

第五表 家族の歌を好む状態は (900名, 3才-5才)

家族	祖母	祖父	母	父	姉	兄	叔母	叔父	その他
数	16	13	270	122	244	168	41	16	9
%	1,8	1,4	30,0	13,5	27,1	18,7	4,5	1,8	1,0

第六表 家族の音楽教養

	洋 楽	邦 楽	計
祖父	1	4	5
祖母		2	2
父	14	5	19
母	15	10	25
兄	5		5
姉	13	3	19
何も習はない		70%	228

第七表 家族の演奏する楽器 (300名)

	種 類	人数	%
洋 楽	ピ ア ノ	17	4,1
	オ ル ガ ン	24	7,2
	ヴ ァ イ オ リ ン	17	5,1
	シ ロ フ オ ン	66	19,8
	ハ ー モ ニ カ	53	15,9
	ギ タ ー	33	9,9
	ア コ ー デ イ オ ン	5	1,5
	そ の 他	17	5,1
邦 楽	琴	38	11,4
	三 味 線	18	5,4
	尺 八	7	2,1
	笛	2	0,6
	琵琶	2	0,6
	鼓	1	0,3

実である。然しこゝに取上げた問題は幼児の指導に当る場合になるもので此の様な検討を終た幼児個々の記録がやがて彼等に与えられ

る教材の撰択に根拠を与え、指導計画を立てる場合の基礎となるべきであらう。